

夜久氏位牌の記文について

会身 佐 脇 貫 一

(住所 庄内市津志河内)

岩田善市先生の『市福所の古塔の謎』は興味深く読ませてもらった。市福所の潜龍塔といわれる古塔については、塔の推定年数六百年前後と又て、私はさきにも南朝期における南朝皇族立過宮の潜行と結びつけて説明しようとしたが、七分通りは解明できておくと三分はどうかとも結ぶつかないというのが現実であった。

岩田先生はかつて故足田泉先生を訪れた京都府天田郡中夜久村の西垣藤松氏が持参したという祖先の位牌に記された伝承について考証され、さらに佐伯佐伯を来訪された市福所の古塔を尋ねられたという夜久義重氏のことにもふれ、いわゆる潜龍塔の謎を解こうとなさっているが、先生の解明にはかなり無理な点が多いので、その箇所について私見をのべておきたい。

さて問題の第一の位牌も、第二の位牌もともに後世のくられたものに相違ないが、現物と見ていないので時代推定ができない。しかし、第一の位牌の「院殿号」と「居士号」、裏の記文「夜久実守」の記事の粗雑さ、年号「逆算年」の数字的ではあるが歴史的に考証できにくい点など、史料としての価値が薄い。もつとも夜未氏の伝承として興味ある説話だが、ただそれだけのものである。

私は第一の位牌の院殿号と居士号の関連にふれたが、この位牌が明治二年八月につくられたことになっているから、法号(戒名)の詮索は問題にならない。裏の記文の「仙台藩中俗名山田仙之助、高内夜久数頭翁、小倉末

狸改夜久実守、居豊後」の銘であるが、これを解すれば山田仙之助は丹波天田郡中夜久村高内(の夜来数頭の弟で、仙台湾に住んでいたが、後兄きたより同村小倉に移り、姓を改め夜来実守と名乗ったが、いつのころか豊後に居住したということになる。

ところが夜久数頭(かすえのかみ)はおそらく主計頭(かすえのかみ)の誤伝で、その「かすえのかみ」が官命でないとして、昔は主計(かすえ)、数衛、数馬などが名前としてよく使われたから、数頭もそうだった例ではないかと考えられるが、頭は守、督、首などとも多く官名に使われるから、私はこれを主計頭の偽称と解している。仙台藩といえは伊達家だが、伊達政宗が会津黒川城から仙台に移り六十二万石を領したのは天正十八年で、それ以前に仙台藩はなかった。

若し山田仙之助が仙台藩士で政宗に仕えた人物であれば、それこそ藩制の確立した慶長六年以降に仕えたものと見てよく、また山田仙之助は改姓して夜来実守となつてゐるが、位牌銘の「佐伯城下二里南の一丁上に登り、八丁四面平地で三十八人と共に瀕死した」という天安二年十月二十七日と仙之助の時代とは七百四十余年が、全くつじつまが合わない。次に大姉号の女性山田仙之助の娘ということと、通称は百合女、十六才のとき仙之助のおとを追うて中夜久村小倉に來たが、貞觀十五年七月十九日に死去した。銘文中の「七年目也」の文字は天安二年から貞觀十五年までのことらしく、実際は十七年だが十を落して記入されている。とまれ天安も貞觀も平安朝初期の年号で、山田仙之助の時代(慶長年代)からほど遠い昔である。

第二の位牌は薩摩藩と佐伯方の夜久実守一族が戦い、天安二年十月二十八日に戦死したと記されている。岩田

先生はここで夜久実守の王家として海部氏を想定し、海部公常山を提出している。そして鏡日本紀延暦四年の項、海部常山の位階昇任の記事を引用して、同時に、同時昇任した根津能勢、近江蒲生、丹波天田三郡大領の記事を混同、常山が天田郡大領を兼ねているように解釈しているが、これは少し無理なようである。また湯本氏系図を参照して、この系図の信憑性についていささかも疑ってはいないようだが、故天田先生のお言葉をかりるまでもなく、これは全く偽系図。海部氏は左しかに佐伯是本と伝えられる大神惟基が佐伯茂を侵犯するまで存続していたと思おれるが、これを証する史料は全くない。海部公常山の時代(七八〇年代)から惟基が活躍した天慶年間(九四〇年頃)まで約百六十年間、一世代を平均三十年として五、六代が佐伯莊に君臨している。おそらくそれは新興武士団に圧迫されながら命運を保っている旧豪族官僚の成れの果てであつたろう。

湯本氏系図は中臣氏、大伴氏、物部氏あるいは忌部氏らの古系図を詳細にしらべて、ソツソないようにつくられ、まことに巧妙にできているが、あまりに巧妙すぎたウソが浮かぶおがっている。海部公常山は佐伯地方というより海部郡に土着した海部直(あまのあた)の一族で、姓氏録によると、海部は地方の豪族である一述の長(ひとこのかみ)の子孫、その称した公(きみ)は中央官制の姓(か)でなく自給で、中央官僚の海部直の支配下に入り、その一族を称した自尊の称号であつた。なお海部とは漁業を司る伴部で、大海部、韓海部など数種類があるが、氏姓としては尾張の海部直、丹後の海部(余部)もあるべという)などがあり、これらの一族として出自未詳の輩後、海部公がある。

次は『佐伯城下二里南の一丁上に登り八丁四面の平地』

という列じもののような場所指示であるが、これを市福所の古塔群台地や汐月の上ノ台においてはめるのほどどうかと思ふ。先般佐伯市教育委員会の加藤健一君が市福所古塔群の調査におもむき、塔群を整理して写真に収めたが、その塔群中に永正十三年の刻銘がある宝篋印塔の軸身があつた。潜龍塔とよばれる五輪塔の推定年代、建武の年号などから考えても、この古塔群はどうしても南北朝期以前にはつかぬはずだ。

位牌の年号が天安二年(一一二二年)であることから、岩田先生は奈良朝、平安朝初期にあつたであろう隼人族など南九州勢力の侵攻を想定しているが、すでに延暦十九年(八八〇年、二七〇年前)に朝廷は大隅・薩摩に班田制を行つており、史上に残つていゝ隼人族最後の反乱は養老四年(七二〇年、二二〇年前)で、大伴旅人が將軍となつてこれを討伐している。もつとも養老四年以後における九州の争乱には、天平十二年(七四〇年)の藤原広嗣の反乱があるが天平宝字五年(七六一年)に西海道に節度使を置き、地方の統制に力を入れたので土豪の反乱は全く跡を絶つた。

夜久氏の伝承は同家だけの伝承であつて、史実ではない。市福所の古塔は誰のものか、そこがどういふ史跡であるか、史料も伝承もないので判然しないが、屋敷跡ま左寺跡であることは地名で想像される。いずれにしても貴重な古文化財である古塔遺群が数十基残つているのだから、これを保護し、努力して史料を探り、この顕彰をいふ月代はなさない。

(附記)

佐伯市教委では加藤理事が主となつて、市福所の古塔群の調査が行われていて、本会もこれに追随して探訪のことに計画している。有志の会員の同行を希望している。時日未定。